

優秀賞

【作文（中学生）の部】

『人と人とを繋ぐ土砂災害から学ぶ教訓』

山口県 周南市立周陽中学校 3年 ながみね 長峯 ありき 有彩

あの日をさかいに私の土砂災害に対する気持ちが変わった。それは平成25年10月、伊豆大島であった土砂災害だ。なぜならその災害は死者・行方不明者39人、全壊家屋23戸という悲惨な被害が生じたからだ。伊豆大島は活火山三原山で知られた観光地で多くの観光客が訪れていた。しかし台風のせいで三原山の斜面が崩れ落ち火山灰などの砂や斜面の木々が流れ下り、土石流と流木による災害をもたらした。その土砂災害の跡は未だになまなましく残っていた。私はこの出来事をニュースや新聞、インターネットなどで見る度に「どうしたら土砂災害の被害をへらせるだろうか。自分達は今、どうすればいいのでしょうか。」と思った。実際に災害にあった人は「何も備えていなかったし、突然起こりあつという間に流れてきたから何をすればいいのか分からなかった。」と話していた。私は土砂災害から1人でも多く助けるためにどうしたらいいか自分自身または資料をもとに考えてみた。

1つ目はハザードマップをしっかりと活用することだ。そもそもハザードマップとは自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したものである。予測される災害の発生地点、被害の拡大範囲及び被害程度、さらには避難経路、避難場所などの情報が地図上に図示されている。これを利用することにより災害発生時に住民などは迅速・的確に避難を行うことができ、また2次被害発生予想箇所を避けることができるため、災害による被害の低減にあたり非常に有効である。平成12年の有珠山噴火の際に、ハザードマップに従い住民・観光客や行政が避難した結果、人的被害から防がれたという例があった。だからこそ、家庭に1つ必ずハザードマップを持つことを義務づけるべきだと感じた。たとえ持っていたとしても見方が分からないと意味がないので1度家族全員で見方の確認をすることも必要だろう。

2つ目は災害が起こる前にあらかじめ家族内でもし起こった時のことを話し合っておくということだ。災害はいつ起こるか分からない。また、もし起こったとしても家族が一緒にいるとは限らない。だから、災害で離ればなれになった場合にどのようにして、またはどこで家族全員が合流するのか前もって話し合うことが大切である。最近では子供も大人も携帯電話を持っているのでそれで連絡をとり合うという考えもあるが、災害時は電波がつかないことが多いためきちんとみんなで話し合うことを私は勧める。家族内で話し合うことにより会話がはずみ、いい雰囲気を作ることができます。また、コミュニケーション能力をみがけ、家族の仲がより一層深まるのではないかな。

3つ目は正しい情報を聞き、状況をすぐに把握することだ。電気が止まってしまう状態になってしまうような大規模の土砂災害が発生した場合に、正確な情報源となるのはラジオである。多くの自治体はコミュニティFMと協定を結んでおり、災害対策本部からの情報をすばやく放送するしくみになっているのでいち早く正しい情報を入手することができる。だから日頃から受信機の用意と確認をすることを心がけるべきだ。災害が起こるとどうしても間違った情報が流出することがあり、不安でいっぱい被災者はそれを簡単に信じてしまう。そんな事態を防ぐためにも、正しい情報をみぬく力をきたえるのもいいかもしれない。

日本中の人に土砂災害の意識を高めるために国土交通省は「土砂災害防止月間」をつくり、取り組みの一環として全国の小中学生を対象に、絵画、ポスター、作文の募集及び表彰を行っている。

長野県では昔起こった土砂災害の恐ろしさを現代に伝えるために、土砂で流されてきた岩や家を残す活動をしている。また、その運ばれてきた岩には「災害を忘れぬために」と刻まれていた。少しでも被害をへらそうという人々の知恵と努力、そして思いのかたまりだと私は思った。

災害は人の命を、幸せを、家を、大切な物をうばってばかりだ。だからこそ我々は災害から学ばなければならない。そして学んだことを次の世代へ語りつがなければならない。自分の今住んでいる場所は安全とは決して言いきれない。日頃から頭の中で意識し行動、生活するよう心がけるべきであろう。そして、忘れないでほしい。今まで我々の命をうばってきた数々の災害を。そして、伝えてほしい。その災害から学んだことを。1人でも多くの人が生き、平和な世界を築くために。あなたの行動が未来を変える。